

# ビビアナ エスピン エクアドル出身の元キリスト教徒

:

明:エクアドル人女性によるイスラ ム改宗 。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 女性](#)

より: ビビアナ エスピン

日14 Sep 2015

集日 14 Sep 2015

私の名はビビアナ エスピンです。私はエクアドル出身の21 です。

人生には常々、良いときと いときがあります。 去について思いを せると、ときに沈痛な思いに苛まれることがあります。一般的な家族に生まれること、思いやりのある など、自分の 去を えたいと思うこともあります。はっきりとは分かりませんが、あらゆる物事には理由があるのだと思います。

私の幼少期は非常に困 なものでした。父は暴力的で、母は父に してても 属的で、家庭は 的にも苦境にありました。そして他のことも私の兄弟や私自身の精神 生に を及ぼしていました。私の幼少期、母は家で母音や英 の などを教えてくれたため、私は早くから学 に けるようになり、4 になるまでには学校に通い始めていました。

は私をカトリック スク ルに入学させました。母は私が神に して良い信仰心を持つこと、そして良い教育を得ることを望んでいたため、そこを に入っていました。その学校は私たちが住んでいた都市でも最も 秀な学校の中の1校だったため、父もそこを に入っていました。彼は っりで虚 心が かったため、友人たちに私がそこに通っていることを自慢するのが好きでした。

入学当初から、私は他の生徒たちよりも幼かったため、いじめにあいました。彼らからは の毛にガムをくっつけられたり、所有物を盗まれたり、お弁当をゴミ箱に てられたりと、散々な仕打ちにあいました。

私は一番年下だったので、校 が私の面倒を てくれるようになりました。休憩 には他の子供たちと校庭で ぶことはありませんでした。その 中、私は校 室や秘 室で ごしたものでした。そこはカトリック スク ルだったため、教 、校 、管理者たちはほぼ全 修道女でした。

私は彼らととても しくなり、彼らも私を可 がってくれるようになり、学校の敷地内にあった彼らの家で ごすことも多くなりました。彼らの家は校 のすぐ横にあったのです。

私はその年 で、すでに他の 人や子どもたちとは大きく なっていました。

は私が8 のときに 婚しましたが、それは今もこれまでの私の人生の中でも最も悲しくつらい出来事です。 じられた空 の中でとても い を ごしていると、私は色々なことを考え始め、答えの つからないことについても考え巡らせるようになりました。

母はより宗教的になりましたが、同 に私に して支配的になりました。それは には良い影 もありましたが、 にはそうではありませんでした。私は常に恐怖 不安 疑念と 合わせで育ってきました。

私は静かで落ち着いたところ、特に自然の中を好むようになりました。そうした だけは、一人で ごすことも苦ではありませんでした。

私はいつも修道女たちと一 でした。学校には 大な の校庭があり、私はいつもそこに寝そべって空を 上げ、私を包み む を感じるのが好きでした。そこでは平和を感じました。

修道女たちは私をととても可 がってくれ、私も彼女たちといるのが好きでした。家庭からの逃避は、神へのご加 を求めることだけでした。

12 のとき、私は母に学校の修道院に入り、彼女らと同じ修道女になりたいと告げました。

しかし母は、私が神の近くに行きたいと思っていることは嬉しいと言ったものの、やがては、私が欲しいことから修道女にはなって欲しくないと言いました。それは学校の最後の年でした。

母からの否定の、私はバイブルを学 することによって神の近くにあろうと努力しました。それを意 して み始めると、そこには多くの事柄が不可解だったり矛盾していたり、一部では不完全な概念さえあることに 付きました。それゆえ、その残りを探す必要性を感じ、それに しての答えは不明瞭で理にかなわないことばかりでした。

私は 宗教についての本を み始め、インタ ネット 索も活用しました。

私はユダヤ教、 教、不可知 、ヒンズ 教、キリスト教の 宗派についての情 を得ました。それらは何一つとして私の 理を 足さしてくれませんでした。イスラ ムに しては、い ばかりしか耳にしたことがなかったため、始めから 味を持ちませんでした。しかし 局はイスラ ムもきちんと べ、 理的な答えを つけるための私自身の最 的な答えを探すことに しました。

三位一体 は私にとっては全く不明瞭でした。それゆえ、私がイスラ ムについて べ始めたとき、私が抱いていた多くの答えをそこから つけ出しました。イスラ ムは理にかなっていませんし、神は唯一であるとクルア ンで り返し されているよう、神の数についての私の疑 に答えてくれました。それは、私のイエスについての疑 にも答えました。またバイブルが改 されていること、そしてそれが元来の形にはないことを知り、私は 遂に真理を したと感じました。

私は 言者ムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）についても に み、彼がモ ゼと非常に近いことを知りました。すべての 言者たちが遣わされたものと同じ教えを携えた神の最 の言者をなぜ信じずにいることができるのでしょうか。それらすべてのことは、私に真の宗教を つけたことを悟らせました。

はっきりとは えていませんが、私が母に宗教を え、ムスリムになりたいと打ち明けたとき、私は17 18 でした。彼女には、市街地にあるイスラミックセンタ を れてより多くのことを学びたいと告げました。母は怒り出し、彼女の家に住めるのはキリスト教徒だけだと言出し、本 で改宗するつもりなら家を出なさいと言われました。そのため、私はそれが冗 だと言い い、その をしのぎました。

彼女は私の叔母に を取り、叔母は反イスラ ムの本を持ってきました。その本を むと怖くなり、 の中には恐怖や疑念の が残されました。それゆえ、私はムスリムに改宗するという考えを止めたものの、元々キリスト教には心地良さを感じなかったため、キリスト教に る は起こりませんでした。

母は、彼女の弟に起きた奇 をきっかけにカトリックから福音派に宗派 えしました。彼は癌を患っており、医者は彼の余生が1 から1ヶ月と宣告していました。それ以来2年がたったものの、彼はいまだ健在です。

母が改宗を 断した日、私は既にイスラ ムについて彼女と しており、一 にイスラミックセンタ へ行き、あの本からの疑念や恐怖について することにしました。あの日の母は とても 嫌が良かったので、彼女はそれに同意しました。それがその日の朝で、夜になると彼女は非常に い 信と共に福音派として 宅したため、彼女とイスラ ムについて会 することはもはや不可能でした。その数カ月 、私はムスリム男性と出会い、しばらくして 婚し、彼とエジプトに引っ越すことになりました。

私の人生の2つの大きな にはエジプトに行くこと、そして私のことを心から してくれ、思ってくれ、あらゆる女の子が子供のときに るようなロマンチックでチャ ミングな王子さまのような良い男性と 婚することでした。しかし、それらの が叶うことはないのだと思い んでいました。なぜなら一方で、私の 的状 はエジプトへ旅行しそうした男性と出会うことを不可能にさせたからで、またもう一方では私のにとっての理想的な男性は の中にしか れないと思っていたからです。

神は私が望んだものすべてを与えてくれました。しかし正直に言えば、私は与えられたものに感 しませんでした。

エジプトに来た も、改宗するかどうかに 信は持てませんでした。私の新しい夫は、学 だけでなく、忍耐と信仰を持ち合わせた素晴らしい女性を 介してくれました。彼女の 名前はラ ヤでした。彼女は私の状 を的 に分析してくれ、イスラ ムへの改宗に わるすべ ての疑念や 解を 拭してくれました。

2009年8月30日の土曜日、私はついにシャハ ダをしました。私がシャハ ダをしたのは、 ただひとえに唯一なる神の存在と、ムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）が最 の 言者で あるという 信に至ったからです。しかし、私は が熟したとを感じるまでは 践を始めない と宣言しました。彼らは私に同意したものの、当 の私には本格的な学 を始める意 もま だありませんでした。

翌 の月曜日に状 は一 してしまいました。夫と私の は、私の不 から深刻な状 に ってしま い、彼は私に 婚宣言をしたのです。私の世界はバラバラになってしまった感じがしま した。

望していた私には、ラ ヤ以外に助けを求める人がいませんでした。あの日以来、彼女 は私を支援してくれ、 の娘同 の いをしてきていました。

母はいつも、人 は いことが起きるまで学ばないものだと言っていました。それは非常 に真 をついた言 であると思います。私の夫に するあらゆる は、アッラ に助けを い求め 、アッラ のお赦しを求めなければならない必要性を感じさせました。

私はまだスタ ラインに立ったばかりの状 ですが、主に仕え、感 したいと真 に思っ ています。私は衣服の着こなしを え始め、ヒジャ ブを着けるようになりました。私は人 生のすべてを えたいと思っています。私は神に、そして する夫に、そして自分自身に 、私が新しい人物であることを 明したいと思っています。

婚、夫は近い将来によりをしてくれる可能性を わせてくれています。神にこそすべての称あれ。

今、私は宗教的に真面目になること、そして彼は私を すまでの を必要としています。あらゆる面において、私は年末までに神が私に力をお与えになることを っています。私は神の 定が何であれ、それを受け入れなければなりません。

それは私の人生を根底から えた、教 だったのです。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/2872>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。